
日々の記憶

葛城 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日々の記憶

【Nコード】

N9450F

【作者名】

葛城 炯

【あらすじ】

母が送ってくれた映像の中には私の記憶にない父の姿があった。

(前書き)

記憶は心の糧

「お父しゃんとお散歩行くの」

映像の中の私はいつでも子どもだ。

映っている父は嬉しそうな寂しそうな顔をしている。

撮っている母の姿が映像の中の玄関脇の鏡に一瞬だけ映っている。
その姿は何処か悲しげだ。

母が靴を履いている間に私は父を引っ張って随分と遠くまで歩いている。引っ張られる父の背中が薄く感じられた。

でも記憶の中の父にはない元気な姿。

私の記憶の父は病院のベッドに横たわっている姿。

記憶の中の私はランドセルを背負って学校帰りに病院へ行っては父に駄々をこねているだけ。

私を見る父の視線はそれでも柔らかかった。

「お母しゃん。この子はだあれ？」

隣で映像を見ていた娘が聞いてくる。

私のコトよと告げると少し怒った。

「違うよ。お母しゃんはお母しゃん。この子はこの子」

お母さんも小さい時があったのよと告げると娘は怪訝な顔をした。

母がこの星に住む私に送ってくれた映像は1つだけ。

他にも色々あるのだろうがそれらは母のモノなのだろう。

たぶん、人は変わらない。

他の星に住むようになって、他の銀河へ行けるようになって、記憶を心の糧にして生きていく。

それだけは変わらない。

星の命が人類よりも短くなったこの時代でも。

「お父しゃんとお母しゃんとお散歩」

娘は握った私と夫の手を嬉しそうに振る。

半年後には妹か弟がいるわよと娘に告げたら吃驚した後で喜んで
いた。

私は娘の笑顔を忘れない。

（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9450f/>

日々の記憶

2010年12月10日20時49分発行